

平叙疑問文について

文学部英語コミュニケーション学科教授
鈴木 雅光

1 平叙疑問文とは

平叙疑問文 (declarative question) は、yes-no疑問文のように主語と操作詞の倒置という文法的操作は行わず、平叙文の語順のまま、文末に疑問符を付けて上昇調で発音する疑問文である⁽¹⁾。例えば、次のような例である。

(1) She agreed to take the money? - *NLF* (11)

(彼女はお金を受け取るのに同意しましたか)

一方、wh疑問文は、(2c) のような間接疑問文以外は、平叙文の語順で疑問文になることはない。

(2) a. Who is he?

(彼は誰ですか)

b. *Who he is?

c. Do you know who he is?

(彼が誰だか知っていますか)

平叙疑問文を調べてみると、yes-no疑問文とは異なるいくつかの特徴が観察される。本稿では、平叙疑問文の現れる文脈、特徴、依頼・許可表現との相違、頻度、及び常に平叙疑問文で使われる例について述べる。

2 平叙疑問文の現れる文脈

まず最初に、平叙疑問文がどのような文脈に現れるのか見てみよう。

2.1 くだけた会話

平叙疑問文はくだけた会話に用いられる。Swan (1980: 511) は、話し言葉、特にくだけた会話では、平叙文の語順を取ることがあると述べている。平叙疑問文は、くだけた会話で用いられることから、あらたまった書き言葉には適さないことになる。次の例はこのことを

示す好個の例である。

(1) a. Dear Sir,

*You have received my letter of June 17th?

b. Dear Sir,

Have you received my letter of June 17th? –Swan (1980: 512)

(拜啓 6月17日付けの私の手紙を受け取っていただけましたでしょうか)

商用や公用の手紙の書き出しであるDear Sirと、くだけた平叙疑問文は合わないので (1a) は不適切な組み合わせということになる。

平叙疑問文に主語と操作詞の短縮形、及び操作詞とnotの短縮形が多いのもくだけた会話の特徴を示している。資料ACFの平叙疑問文を見てみると、短縮形にできるyou are (you're), you have (you've), it is (it's), that is (that's), there is (there's), you would (you'd), is not (isn't), do not (don't), was not (wasn't)などは、ほぼすべて () 内のように短縮形となっていた。資料ACFでは、短縮形になっていない例は22例中わずか1例のみである。

(2) *You're* Daniel Trumper? –ACF (597)

(ダニエル・トランパーさんですね)

(3) *You've* closed the deal? –ACF (275)

(取引を止めたんですね)

(4) So *there's* nothing to stop you phoning Mr Anson now? –ACF (731)

(それであなたはどんなことがあってもアンソンさんに今電話するのですね)

(5) You *don't* still have the contract, by any chance? –ACF (406)

(ひょっとしてまだ契約していないのですね)

2.2 確認

Gunlogson (2002: 124) は、平叙疑問文の用法には文脈上の制限があり、いきなり使われることはないと述べている。つまり、平叙疑問文には既に何らかの話題になっていることを確認するという前提があるのである。次の (1a) は、情報を求める疑問文であるから問題はないが、(1b) は妙になる。

(1) [くだものを食べている同僚に]

a. Is that a persimmon?

b. That's persimmon?

このように平叙疑問文は既に知っていることを確認する場合に使われる。(2)の例では、bossが既に話題に出ていて、その確認のために(2)の文が発せられるのである。

(2) That's the boss? (= I suppose that's the boss, is it?) –Swan (1980: 513)

(あの方が主任ですね)

相手の言ったことが分からなくて、もう一度繰り返してもらいたい場合も、平叙疑問文を用いることがある。文の一部に焦点を当てる次のような例によく観察される。疑問詞はあるが、上昇調である。

- (3) a. She's invited thirteen people to dinner. – She's invited how many?
(彼女はディナーに13人招待したよ – 何人招待したって)
- b. I've broken the fettle gauge. – You've broken the what? – Swan (2005: 468)
(フェトルゲージを壊しちゃったよ – 何を壊したって)
- (4) a. They're going to Belo Horizonte on honeymoon. – They're going where?
(彼らはハネムーンでベロオリゾンテへ行きます – どこへ行くって)
- b. She's pawned her pearls to pay for it. – She's pawned what? – BLE
(彼女はそれを払うために真珠を質に入れた – 何を質に入れたって)

- (5) You arrived this morning at what time? – MIM (14)
(今朝何時に着いたの)

確認の機能があるということは、平叙疑問文はyes-no疑問文よりは付加疑問文に近いということになる。平叙疑問文の文尾にof courseやrightを添えて確認したり、You mean ...?で確認を求める平叙疑問文もある。

- (6) She knows all about it, *of course*? – Downing and Locke (2006: 204)
(もちろん、彼女はそれについて全部知っていたよね)
- (7) You understand that, *right*? – BNC
(君はそれを理解したよね)
- (8) *You mean* that white-haired old lady? – BNC
(あの白髪の老女のことですね)

法廷で検事や弁護士が被告人質問で確認する場合や探偵が質問する場合に、平叙疑問文が使われることがある。被告人に質問すると言っても、普通、検事は事件の内容について既に知っているのだから、被告人から供述を引き出すため、確認の平叙疑問文が使われるのである。

- (9) “So when you told her, you were actually face-to-face with her?”
“Yes.” – NLF (12)
(「それで彼女に言ったとき、あなたは実際彼女に面と向かっていたのですね」「はい」)
- (10) “You and she didn't have a quarrel? There was no upset between you?”
“None whatever.” – MIM (18)
(「あなたと彼女は喧嘩をしなかったですね。二人の間には問題はなかったですね」「全然ありませんでした」)

2.3 驚き・怒りなどの感情

平叙疑問文は、話者の驚き、怒り、疑惑、意外さなどの感情を示す場合、用いられることがある。(1b)は情報を求める普通のyes-no疑問文であるが、(1a)は驚きを示す。

(1) a. THAT's the boss? (A funny little man like that?)

(あれが上司だって (あんな妙な小男が))

b. Is that the boss? –Swan (1980: 513)

(あの方が上司ですか)

次も想定外の意外の例である。意外だから驚くことになる。

(2) a. You are going? –Curme (1959: 353)

(君が行くんだって)

b. He's dead? –大塚・中島 (1982: 999)

(彼が死んだって)

平叙疑問文の前後に驚きや不信の念が明示されることがある。(3)–(5)の例では驚き、(6)の例では不信の念が文脈上示されている。

(3) The nurse looked at her *in surprise*. “You know him?”

“Yes.” –*NLF* (185)

(看護婦は驚いて彼女を見た「彼を知っているの」「ええ」)

(4) “He told you that?” said Charlie, trying to sound *surprised*.

“Oh, yes.” –*ACF* (406)

(「彼は君にそのことを言ったの」とチャーリーは驚いたふりをして言った。「もちろんさ」)

(5) “You're asking me?” Hickey *shrugged*. –*STL* (46)

(「おらに尋ねてんのか」ヒッキイは肩をすくめた)

(6) “Your mother approves of Charlie Trumper?” said Becky *in disbelief*.

“Oh, yes, darling.” –*ACF* (142)

(「あなたの母はチャーリー・トランパーのことを認めたの」とベッキーは信じられないという顔付きで言った。「ええ、もちろん」)

3 平叙疑問文の特徴

3.1 評言節

平叙疑問文には文頭や文尾にI suppose, I hearのような評言節 (comment clause) が現れることがある。評言節は文の陳述内容に対して話者のためらいや確信のなさなどを示す。

(1) *I suppose* you can't play football, Carey? –*OHB*

(カリー、君はフットボールができないよね)

- (2) Boris will be there, *I suppose?* – Quirk *et al.* (1985 : 814)
(ボリスはそこに行くだろうね)
- (3) “Becky isn’t in any trouble, *I hope?*”
“Certainly not.” – *ACF* (205)
[「ベッキーは困っていないでしょうね」「もちろんさ」]
- (4) *I hear* you’ve been offered a new post? – Downing and Locke (2006: 204)
(君は新しいポストを提供されたいね)

3.2 then, so; of course, surely

平叙疑問文の文頭あるいは文尾には、「それなら」と推論を示す連結語である *then* や *so* が現れることがある。これらの語は「それなら～ですね」の意味なので、確認の機能を持つ平叙疑問文と相性がよい。それは平叙疑問文が意味的には確認の付加疑問文に近いからである。

- (1) a. *Then* you think we can keep it? – *CEG* (1990: 204)
(それなら我々がそれを保管できるとお考えですよ)
- b. She wasn’t invited to the wedding, *then?* – Downing and Locke (2006: 204)
(だから彼女は結婚式に招待されませんでしたよね)
- (2) *So* you never had a chance to talk to him again? – Bache and Davidsen-Nielsen (1997: 118)
(それであなたは二度と彼と話す機会がなかったのですね)

次の例は *so* と *then* が共起している。

- (3) *So* you’re on a scholarship, *then?* – *BNC*
(そういうわけで君は奨学金をもらっているのですね)

態度付加詞 (attitudinal adjunct) である *of course* や *surely* が、平叙疑問文に現れることがある。これらの語も念押しを示すので、平叙疑問文と相性がよい。

- (4) They’ve spoken to the ambassador, *of course?* – Quirk *et al.* (1985: 814)
(もちろん、彼らは大使に話しましたね)
- (5) But *surely* you can just defrost it in the microwave? – Downing and Locke (2006: 204)
(でも確かにマイクロ波の中でそれを溶かすことができますよね)

3.3 片寄り

平叙疑問文が肯定か否定かの片寄りがあることに関して、池上 (1977: 299) は「話し手が答えが *yes* になるか *no* になるかについて既にある結論を下しているという趣きがある」と述べているように、平叙文疑問文に片寄りがあることはしばしば指摘されている。例えば、

今井・中島 (1978: 169) も「平叙疑問文は肯定的片寄り（または、否定形では否定的片寄り）を持っている」と述べている。

従って、肯定形の平叙疑問文（1）の例では断定形（assertive form）のsomeが現れることになる。

(1) The guests have had *something* [**anything*] to eat?

（客には何か食べ物があったんだよね）

さらに、今井・中島 (1978: 169) は、「肯定形を用いるならばyesが返ってくることを、また、否定形を用いるならばnoが返ってくることをそれぞれ期待している」と述べている。Quirk *et al.* (1985: 814) も、肯定の疑問文は肯定的志向（positive orientation）、否定の疑問文は否定的志向（negative orientation）があると説明する。

従って、肯定的片寄りを持つsomeの分布、及び否定的片寄りを持つanyの分布は、その志向に従うことになる。

(2) *Somebody* is with you?

（君は誰かといたでしょう）

(3) You didn't get *anything* to eat?

（食べ物は何もとらなかったよね）

しかし、平叙疑問文とその応答文を検討してみると、肯定形の平叙疑問文の応答にはyesを、否定形の平叙疑問文にはnoを期待しているという大筋の傾向は認められるが、必ずしも期待通りにyes/noが現れていない例もある。応答は期待に反することが、つまり予想しない応答が起こることが、しばしばあるからである。

資料NLFには肯定形の平叙疑問文が35例、否定形の平叙疑問文が5例ある。肯定形の平叙疑問文35例にyesで応答している例が34例、noで応答している例が1例であり、ほぼ期待通りの応答となっている。否定形の平叙疑問文5例には5例ともnoで応答している。これも期待通りの応答である。

一方、資料ACFには肯定形の平叙疑問文が12例、否定形の平叙疑問文が2例ある。肯定形の平叙疑問文12例にyesで応答している例が7例、noで応答している例が5例であり、ほぼ半々である。これにより期待通りの応答にはなっていないことが分かる。否定形の平叙疑問文2例には2例ともnoで応答している。こちらは期待通りである。

この2つのデータから、肯定の平叙疑問文は肯定的志向、否定の平叙疑問文は否定的志向があるという傾向が認められると言えよう。しかし、そうでない場合もあるということは無視できない。

例を見てみる。(4) では期待通りにyesが、(5) では期待に反してnoが現れている。期待は質問者側の期待であり、どのような応答が発せられるかは、あくまでも応答する側にゆだねられている。期待に合致する場合もあり、合致しない場合もあるのが応答である。

(4) “You’ve actually seen Daniel Trumper?”

“Oh, yes.” – *ACF* (466)

(「実際ダニエル・トランパーに会ったんでしょう」「もちろんですとも」)

(5) “You’ve written to tell Trentham, of course?”

“No.” – *ACF* (181)

(「もちろん、手紙を書いてトレンサムに言ったんでしょう」「いいえ」)

次の例は否定形の平叙疑問文に対して、期待に反してyesで応答している例である。期待に反して応答している分、たたみかけて答えている。

(6) “You don’t like Japanese food?”

“Oh, yes, I do! I do like it very much!” – 毛利 (1980: 198)

(「和食は好きじゃないですね」「いや、好きです！大好きですよ！」)

疑問と応答はスムーズに行く場合もあるが、行かない場合もある。言葉は人間の紡ぐものであり、どのように紡ぐかは人間の気持ちや感情が加味されるので、予想できないケースもあるのである。

3.4 2人称主語と省略

平叙疑問文の主語は2人称が多い。2つの資料で各人称の頻度を調べてみた。*NLF*には平叙疑問文が59例、*ACF*には平叙疑問文が49例あった。そのうち各人称の例文の数と頻度は次の表の通りである。

	1人称	2人称	3人称
<i>NLF</i> [59]	5 (8.4%)	36 (61%)	18 (30.5%)
<i>ACF</i> [49]	7 (14.2%)	26 (53%)	16 (32.6%)

両方の資料ともほぼ同様の傾向を示していることが観察される。2人称の頻度が最も高く、3人称の頻度は2人称の頻度の約半分である。1人称の頻度が最も低い。平叙疑問文は確認のために使われることが多い。確認は対話の相手にするものであるから、2人称の頻度が最も高くなるのは当然であろう。

平叙疑問文が2人称主語の場合は主語が省略されることがある。

(1) a. Want a drink? – Quirk *et al.* (1985: 896)

b. Turned all right?

(1a) のWant drink? は、平叙疑問文 You want a drink? のYouが省略されたものと考えられる。またはyes-no疑問文のDo youが省略されたものとも考えられる。(1b) は、平叙疑問文で主語Youの省略である。Yes-no疑問文の操作詞+主語 (Did you) が省略されたも

のとは考えられない。なぜなら (1b) を Did you の省略と考えると、残された部分は Turn all right?であるのに、TurnがTurnedと過去形になっているからである。

Yes-no疑問文においては主語は省略されない。省略されるとするなら操作詞+主語が共に省略される。この点で平叙疑問文と異なる。

(2) *Did [you] turn all right?

(3) a. *Do [you] want a drink?

b. [Do you] Want a drink?

(4) a. *Are [you] a student?

b. [Are you] A student?

4 平叙疑問文と依頼・許可の疑問文

平叙疑問文と依頼・許可の疑問文を比較してみると、興味深いことが分かる。

(1) You will be back early this evening?

(2) Will you be back early this evening?

(1) は「今晚早く戻るんでしょう」という平叙疑問文の意味しかない。(2) は普通の疑問文の意味の他に「今晚早く戻ってくださいね」という依頼文の意味も可能である。要するに、平叙疑問文では依頼の意味は表せないのである。

(3a) と (4a) の依頼の意味は、それぞれ (3b) と (4b) の平叙疑問文によって表すことができない。(3b) と (4b) は単純な疑問文の解釈しかできないのである。

(3) a. Will you give me a hand?

(手伝ってくださいませんか)

b. You will give me a hand?

(手伝ってくれるんでしょうね)

(4) a. Will you undo my bra?

(私のブラを外してくれない)

b. You will undo my bra?

(私のブラを外すんでしょうね)

許可の疑問文にも同じようなことが言える。(5a) と (6a) は許可の意味であるが、(5b) と (6b) のように平叙疑問文になると、許可の意味にはならない。

(5) a. May I sit down?

(すわってもいいですか)

b. I may sit down?

(すわるかもしれないよね)

(6) a. Can I have some water?

(水をもらえますか)

b. I can have some water?

(水をもらえるよね)

また次のような違いがある。平叙疑問文は主語と操作詞を省略してDoctors? のような1語文の疑問文を作ったり、あるいはWith Dada? のような2語文の疑問文を作ったりすることが可能であるが、依頼・許可の疑問文はこのような不完全な形での疑問文はない。依頼文や許可文にはWill you ...?/May I ...? というように定型があり、形式がきちんと決まっているのである。

5 平叙疑問文の頻度

平叙疑問文はyes-no疑問文と比較して、どれくらいの頻度で現れるのだろうか。3つの資料*NLF*、*ACF*、*NPM*を用いて調べてみた。ただし主語と動詞の現れる平叙疑問文で、かつyesかnoで応答している例のみを調べた。Your wife? のような主語と動詞の省略された例は除いてある⁽²⁾。なぜならyes-no疑問文ならYour wife? にはIs sheが、平叙疑問文ならShe isが省略されていると考えられるが、どちらが省略されているかは判断が難しいからである。

*NLF*にはyesかnoで応答するyes-no疑問文が177例現れる。そのうち平叙疑問文は40例現れている。平叙疑問文の頻度は約23%である。*ACF*にはyesかnoで応答するyes-no疑問文が180例現れる。そのうち平叙疑問文は14例であり、頻度は約8%である。*NPM*ではyes-no疑問文が75例あるが、平叙疑問文は10例であり、頻度は約13%である。

	Yes-no疑問文	平叙疑問文	頻度 (%)
<i>NLF</i>	177	40	23
<i>ACF</i>	180	14	8
<i>NPM</i>	75	10	13

この結果が示すように、yes-no疑問文に比較して平叙疑問文の頻度は低いと言える。平叙疑問文は、くだけた会話や既に知っていることを確認したりする場合に現れるというように、文脈がある程度限られている。これに対して、yes-no疑問文は、普通、単純な疑問から自由に問を発するので、使用頻度が高いのは当然のことと言えよう。

平叙疑問文の出現率が高いのは推理小説である。これは2.2節でも述べたが、探偵が相手に確認のために質問することが多いからである。

6 常に平叙疑問文

常に平叙疑問文の形で使われる例がある。次のように問い返すときの表現である。

(1) I beg your pardon?

(恐れ入りますがもう一度おっしゃってください)

この表現はDo I beg your pardon?とはならない。BNCやGoogleで検索しても検出しない。なぜなら、これは相手の言葉を聞き返すときに用いられる表現で、返事を期待しているのではないからである。従って、Yes, I do. /No, I don't. のような応答はない。(1) は一種の確認の表現に近い。質問ではない表現は、慣用的な表現や決まり文句に多い。

反対に、平叙疑問文にはならない表現もある。依頼・許可表現がそうであることは4節で述べたが、May [Can] I help you? のような表現も平叙疑問文にはならない。

(2) a. May I help you?

b. *I may help you?

(2a) は客に向かってよく使う決まり文句の表現であるが、普通この表現はYesかNoの情報要求している。従って、次の例のようにYesかNoで応答することが可能である。

(3) Can I help you at all?

No, I'm alright. I'm just looking. – Billbrough (2007: 235)

(何か差し上げましょうか。いや、大丈夫です。見ているだけですから)

(注)

(1) 下降調の平叙疑問文もある。相手から賛成の感触を得たが、確認のため尋ねる場合である。今井・中島(1978: 169) は、下降調の例として次の例をあげている。

So you agree to this plan?

Yes-no疑問文は上昇調の音調で発せられる、と多くの文法書が説明しているが、Quirk *et al.* (1985: 807) は、Survey of English Usageの調査では、上昇調430例に対して下降調は90例あったと報告している。上昇調5例に対して下降調1例の割合で現れている。法助動詞can (could), may (might), wouldの疑問文は、両者がほぼ同数であったという。

BLEは、平叙疑問文が2つ以上の節からなる場合は、上昇調は少なくなるとしている。

You think we should keep the money even though we know it's been stolen?

(2) この種の疑問文はEllipted *yes/no* questionsと呼ばれることがある。Downing and Locke (2006: 204) 参照。

(資料)

ACF : *As Crow Flies* (1991), Jeffrey Archer

BLE : *BBC Learning English* <[http://www.bbc.co.uk/worldservice/learningenglish/...](http://www.bbc.co.uk/worldservice/learningenglish/)>

BNC : *British National Corpus*

CEG : *Cobuild English Grammar* (1990)

MIM : *Murder in the Mews* (1937), Agatha Christie

NLF : *Nothing Lasts Forever* (1994), Sidney Sheldon
NPM : *Not a Penny More, Not a Penny Less* (2003), Jeffrey Archer
OHB : *Of Human Bondage* (1915), William Somerset Maugham
STL : *The Small Town Lovers* (1978), Edna O'Brien

REFERENCES

- Bache, Carl and Niels Davidsen-Nielsen. 1997. *Mastering English*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Bilbrough, Nick. 2007. *Dialogue Activities*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Curme, G. O. 1931. *Syntax*. Boston: Heath. Rpt., 丸善, 1959.
- Downing, Angela and Philip Locke. 2006. *English Grammar*. London: Routledge.
- Gunlogson, Christine. 2002. "Declarative Questions".
 <http://www.nytud.hu/program/szuperkurzus2006/Gunlogson_2002.pdf>
- 今井邦彦・中島平三. 1978. 『文 (Ⅱ)』 (現代の英文法 第5巻). 研究社出版.
- 毛利可信. 1980. 『英語の語用論』. 大修館書店.
- 大塚高信・中島文雄監修. 1982. 『新英語学辞典』. 研究社.
- Quirk, Randolph and Sidney Greenbaum. 1973. *A University of Grammar of English*. London: Longman. 池上嘉彦訳『現代英語文法－大学編』紀伊國屋, 1977.
- Quirk, R., S. Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 鈴木雅光. 2008. 「少数語数の応答文」. *dialogos* No. 8. 東洋大学文学部紀要第61集 英語コミュニケーション学科篇.
- Swan, Michael. 1980¹, 2005². *Practical English Usage*. London: Oxford University Press.

On Declarative Questions

SUZUKI, Masamitsu

The purpose of this paper is to investigate some characteristics of declarative questions. Declarative questions are questions which use affirmative word order with a rising intonation, such as *She agreed to take the money?*

In examining declarative questions we can find some characteristics different from those found in *yes-no* questions as follows.

- a. Declarative questions appear in an informal context rather than in a formal one.
- b. Declarative questions are often used to ask a hearer to make sure of a topic of conversation which a speaker knows or has understood.
- c. Declarative questions often express such emotional feelings as surprise, doubt, or unexpectedness.
- d. Declarative questions often appear in comment clauses like *I suppose* you can't play football?
- e. Declarative questions often begin with words such as *then* and *so*.
- f. Positive declarative questions usually have positive bias, while negative declarative questions usually have negative bias.

Also discussed in the paper are differences between declarative questions and request/permission sentences, and the frequency of declarative questions based on data which I have collected.